



県民会議会長賞 「お弁当の味」

角森

玲子



受話器を取って十円玉を入れる。
ジーコロコロ、ジーコロコロ…トウルルルー、トウルルルー…。

「もしもし」「あ、おじいちゃん！」
その日小学校の給食は休みだった。

母に言うのを忘れていた私は、弁当を持ってきてはいない。学校へ来てそのことに気づき購買の赤電話から電話をかけたのだ。

「あのね、おじいちゃん、今日お弁当を持ってくる日だったの」そこまで言いかけると祖父は、
「よし、わかった、何時までだ」

「十二時十五分に昇降口で待ってる」

「わかった」と祖父は電話を切った。

四時間目が終わって、私は昇降口で祖父を待った。祖父は自転車でやって来て、「ほら」と布袋を私に渡すとさっさと帰って行った。布袋の中には輪ゴムを掛けた新聞紙に包まれた弁当があった。おじいちゃんが包んだんだな、とすぐにわかった。弁当の蓋を開けると、中身に驚いた。赤と白のかまぼこ、ごまが振りかけてある黄色いいり卵、菜漬けのみじん切りをしろ飯と混ぜた菜漬け飯。

おじいちゃんが作ったんだ。赤いウィンナーも唐揚げも入っていないけど、そのお弁当はとてもおいしかった。台所に立ったことのない祖父が一所懸命に作ってくれたお弁当。ひと口食べるごとに、じーんと胸があったかくなった。残さず食べた。ごちそうさま。

おじいちゃん、あの時は本当にありがとう。



「家庭の日」賞 「神田神保町」 門脇 孝



神田神保町は、古本屋の街。そして、多くの出版社が集まる街。
私は、上京する機会があるたび時間をつくり、この街を歩いて巡る。
娘が憧れたこの街を。

娘は、地元の大学に進学すると、小学校で読み聞かせのボランティアをしたり、書評のイベント「ビブリオバトル」で島根県代表として全国大会に参加したり。まさに本と共に歩んだ学生生活。

そんな娘の夢は、神田神保町にある大手出版社の編集者になること。

その出版社の入社試験の日。

会場は、当時、東京に単身赴任中であった私の職場の近く。試験終了時刻を見計らって足を運ぶと、スーツ姿で颯爽と会場を後にする学生の一団。都内の有名大学からの応募が多いとは聞いていたが、皆、自信に満ちているように見える。

あれ、娘は？ ..いない!

試験、受けなかったのか...

そのとき、誰もいなくなった会場から、一人ぽつんと心細そうに歩いてくる娘の姿。

私を見つけると、一瞬、驚き、そして、普段は見せない無邪気な笑顔。

「えっ？ お父さん、来たの。」

「お疲れさん。近くに刀削麺のうまいお店があるけん、行こう。」

「うん!!」

この日から1年後、病気で急逝した娘。

元気だったらどのような人生を歩んだだろうか。

この神田神保町を、編集者として快活に闊歩する娘。

その姿を思い描いて、またこの街を歩いて巡る。



「家庭の日」賞 「ぎゅっぎゅの時間」

亀谷 佳美



小学1年生の我が子はプチ反抗期も入って素直になれない日も出てきました。

春からお父さんは単身赴任。

その寂しさと小学校入学が重なり、母に怒られる日ばかりで、なんとなく家庭がギスギス。

そこで夏前から取り入れた抱きしめる時間。

子も親も抱きしめ合うことでなんとなく心が落ち着く。

我が子から「ぎゅっぎゅの時間～」とお風呂に入る前に抱きしめ合うことが日課に。

先日、『ぎゅっぎゅの時間』頃にクネクネしながら近寄る我が子。

「フッフツ」

と笑いながら近寄るが、いつもの「ぎゅっぎゅの時間～」という言葉がない。

母もちょっと意地悪して、何もわからないフリをして、

「どうしたの？」

と言うと、

「わかってるく・せ・に」

と。その後はいつも通り抱きしめると嬉しそうにニッコリ。

単身赴任中のお父さんが帰るとみんなで『ぎゅっぎゅの時間』。

家族が離れていても、イライラしていても、家庭が壊れないようにするための大事な『ぎゅっぎゅの時間』は今日も行われています。



しまニッコ賞 「無邪気な二人」 村上 幸大



11月、小さな息子を連れて実家に住む祖父に会いに行った。
2ヶ月ぶりのひ孫との再会。祖父から開ロ一番飛び出したのは、
「あんたは誰かいのう」という言葉。

覚えられないのも無理はない。もう高齢なのだ。

対して息子は元気に名乗った。

2ヶ月前と同じように。覚えてての自分の名前。

何度口にしても新鮮なのだろう。

聞き返されても、大きな声で伝え続ける。

「いくつなんか」

これも前に聞いた質問だ。同じことの繰り返し。そう思っていた。

「3歳です！」

はっとさせられた。

息子は10月で誕生日を迎え3歳になっていた。

祖父は「大きくなったのう」と笑顔で答えた。

対して息子も得意げに笑顔で返した。

きっと2人は無邪気な心でもって、通じ合っているのだ。

2人の間に、繰り返しなんて思いは微塵もない。

いつも真剣、いつも新鮮、そして純粹。

だからこんなに幸せな表情がお互いの表情に生まれるのだ。

思えばコミュニケーションは相手を知りたい気持ちと相手に伝えたい気持ちから始まるのではなかったか。

コミュニケーション能力という言葉が世の中に広まっていく中で、私たちが忘れかけているのはその最初の気持ちではないだろうか。無邪気な2人の何気ないやりとりで、大切なことを教えてもらった。



しまニッコ賞 「小さな鐘馗」

村上 早紀



ある晴れた春の日「どこかへお出かけしたいね」と言うと、「コロナ怖いけえ行かれんよ」と2歳の息子に言われた。

どうにもできない現実を受け止めながら、そんなことを言わせてしまう虚しさを感じていた。コロナがなければ、大好きな水族館も動物園も連れて行ってあげられるし、色んな刺激をたくさん受けさせてあげられるのになあ…と申し訳ない気持ちになっていた。

そんな親の気持ちとは裏腹に、毎日のおうち時間も朝から晩まで元気な息子。狭い部屋を十二分に使いながら、満面の笑みを浮かべ大好きな石見神楽ごっこ。剣を片手にくるりくるりと回る様子は、本物さながら。

「ぼくは鐘馗やるけえ、母ちゃんは鬼!父ちゃんは太鼓!ちゃんと叩いて!ちゃんとやってよ!」

神楽を舞うことに一生懸命で、一心にひたすら舞う息子の姿をみていると、家族に自然と笑みがこぼれ、なんだか大丈夫な気がしてくる。

いつも心の奥にあるコロナへの不安は少しだけ引き出しにしまっておこうかな。さて、鬼棒持って息子と戦うぞ!

疫病退散!我が家の小さな鐘馗の背中は、とてつもなく大きくて頼もしい。



しまニッコ賞 「事故のあと」

大畑 トモ子



昭和五十二年に長男誕生、次いで二男、三男と頼もしい息子たちが次々と生まれました。私たち夫婦は共稼ぎで、しかも私は看護師。早番、遅番、夜勤と目まぐるしく働いていました。「まじめに働く親の背を見て、子どもは決して道を踏みはずすことはない」という恩師の言葉に励まされ、働き続けて来ました。その分、休みの日は思いきり子ども達と遊ぶこと、学校行事は僅かな時間でも顔を見せること、これだけは大事にして来ました。

あれは、二男が社会人一年目の秋のこと。車の運転をされていて事故を起こしました。医師からは「失明するかも知れない、一生ビッコをひくことになるかも知れない(医師の言葉をそのまま引用)」と言われました。私は命があれば、とそれだけを願っておりました。すると長男が「おれがおまえの足になっちゃう」と、三男が「俺がお前の目になっちゃう」と兄と弟が二男の手を握って大きな声で言うておりました。その後二人は病室の外に出て、涙でクシャクシャの顔をこすっていました。この兄と弟がいれば大丈夫、とその時根拠はないが絶対的な安心感を持ちました。おかげ様で二男は目も見え、普通に歩けるまで回復しました。あれから二十年。息子たちは皆、親になり、盆正月に集まると「あの事故で俺たちの団結が強くなったなあ」と口をそろえます。あの日、病室でのことは、決して忘れることはありません。父も母も息子たちも。



入賞 「長女が母になった」

山根 茂雄



結婚しないで高校で教員をしている長女に「別れてもいいから一度は結婚した方が良い。」と、言っていた。結婚すると、親の有難さや大変さがわかって生徒や親御さんへの対応が違ってくると。私の助言が効いたのか結婚式は挙げなかったが、彼と一緒に大阪の市役所に婚姻届を出す写真付きメールが届いた。長女を甘やかして育てた訳でなかったが、長女は家事全般に興味がなかった。私だったら結婚対象にするタイプではなかった。結婚してくれた彼に感謝で一杯であった。

その長女から妊娠したと連絡が入った。結婚するようにと助言したが、親になるようには助言していなかった。長女が親になるとは想定外だった。長女は妊娠が判っても、跳んだり走ったりして教え子からそんなに動いたらだめだと叱られた。生徒より若い教員だった。それでも9月、約一ヶ月の入院の後、36歳の高齡で初めての子供を出産した。

出産したら、大阪のジジ・ババが子供の面倒を見てくれると言っていた娘が一変した。義父母に預けると言っていた子供を、自分が育てると言い出した。変われば変わるものである。子供を保育園に預けて、勤めながら子育てをするというのである。我々は島根県松江市在住で、毎日通うわけにはいかない。ジジ・ババにお願いするしかなかった。結婚した長女が子供を得た。そして、一人っ子では可哀そうだと今年8月に二人目を出産予定である。我々は長女の驚きの変化を見守るだけである。



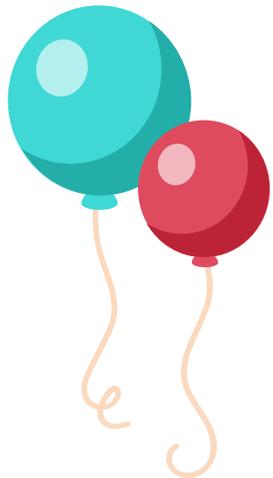
入賞 「いらないことも、うれしいことも。」

0・1

「時間を戻すことはできないけど、いらないことも、うれしいことも、すぐすむ」2017年の私の手帳に残る、当時小学3年生の息子の言葉です。

当時、空手の全国大会出場のため、母親の私と二人で東京へ行った時のことです。我が家はずっと共働きですが、収入の大黒柱は当時も今も夫。その夫が、看護師になるため、当時は学生だったのです。そのため、「節約」「無駄遣いはだめ」というのが、私の口癖でした。そんな折の全国大会出場。うれしさよりも、旅費の出費の痛さのほうが勝っていました。そして、全国のレベルの高さを味わい、帰りの羽田空港でのこと。なんと、出発の便に乗り遅れてしまったのです。搭乗手続きのカウンターで、あまりのショックに崩れ落ちそうになりました。家族には、口を酸っぱくして「節約」と言っているのに、「お母さん自分が情けない。時間を戻したい」とべそをかく私に、息子がとっさに言ったのが、冒頭の言葉です。半べそをかきながらも、この言葉に救われ、手帳に書き留めました。

当時、5年間の夫の学生期間は永遠かに思えました。順風満帆ではないけど、今は正看になって3年目。ほんとだ、いらないことも、うれしいこともすぐすんでいる。どんなことも、永遠に続くことはない。それは当たり前のことだけど、渦中にいる時は忘れてしまう。これからも、いらないこと、うれしいことを繰り返していくでしょう。今年の手帳にも、この言葉を書き写します。



入賞 「私のおばあちゃん」

小島 あかね



家族の思い出を振り返ると、真っ先に浮かぶのは祖母の顔である。私が5歳の時、父に連れられて、島根県にある祖父母の家へ引っ越した。両親は不仲で別居状態だったので、そこに母の姿はなかった。

父は仕事で家を空けることが多く、祖父も働いていたので、祖母と過ごす時間が多かった。

祖母は優しくおおらかで、美味しいご飯をたくさん作ってくれた。親子丼、野菜の天ぷら、カレーの煮付け…好きな食べ物がたくさんある。寒い季節には、ストーブの上で焼き芋を作って、私の帰りを待っていてくれた。帰り道、胸を弾ませていた幼心をよく覚えている。叱るべき時には叱ってくれて、躰をしてくれたことにも感謝している。

祖母は、勉強するように口を酸っぱくすることはなかったが、心に響く言葉を残してくれた。

「勉強は、したらし分、自分のものになる。知識は、お金や物と違って、誰かに奪われることはない。だから、頑張ってみんさい」

幼いながらも、なるほどと思い、祖母を尊敬した。

ご近所さんに、「お孫さんを良い子に育てんさったね」と言われた時には、「良い子に育てたんじゃあない。良い子に育ててくれたんじゃ」と微笑んでいた。なんて徳の高い人なのか。

今、私は遠く離れた都会に住んでいる。それでも、心には、故郷のこと、家族のことがある。90歳を超えた祖母は、今でも元気な声を聞かせてくれる。返しきれないほどの恩を、返していきたい。



入賞 「ばあちゃんの届けてくれた笛」

益本 省吾



中学校の時の僕はよく忘れ物をして、ばあちゃんに学校まで届けてもらっていた。これは僕が音楽の授業で使うアルトリコーダーを忘れた時の話だ。

その日僕は中学校の職員室の前に設置された公衆電話に10円玉を入れ、ばあちゃんに電話をした。

「ばあちゃん授業で使う笛忘れたんだけど、笛持ってきてくれん？」

僕はばあちゃんにそう言ってお願いした。

「どこにあるんかいなあ？あっ、あったけえすぐに持って行くよ。待っとりんさい」

ばあちゃんは素早く笛を発見し、学校までマニュアルの軽トラを走らせてくれるようだった。

6分後、ばあちゃんが僕に届けてくれた笛はアルトリコーダーではなく蛍光緑のホイッスルであった。これで僕は一体どんな音色を奏でればよいのだろうか。ありがとうとお礼を言って僕は緑色のホイッスルを受け取った。わざわざ家から届けてもらった手前、実は忘れたのがホイッスルではなくアルトリコーダーなのだとは、ばあちゃんに言えず、家に帰るばあちゃんの車を僕は微妙な表情で見送った。ホイッスルを吹き鳴らしたい気分だった。

その日の音楽の授業は、1人ずつ規定のメロディーをアルトリコーダーで演奏するというテストであったが、緑色のホイッスルしか持たない僕はただ唇を噛み締めて待つことしかできなかった。

僕のばあちゃんは今も元気に裏の畑で野菜を作っている。いつまでも元気でいますように。



入賞 「宍道湖の夕日と祖母と私」 木田 ひな



私にとって家族はかけがえのないものだ。誰よりも近くで、距離が遠く離れていようとも近くに感じられる、安心を与えてくれる存在だ。様々な困難にも手を取り合い、立ち向かいそして乗り越えることが出来、幸せには、手を取り合いながら喜び、笑うことが出来る。寄り添うこと、優しさ、触れ合い、愛情、励まし、様々なことを経験しながら支え合える大切な存在なのが家族だと私は思う。

専門学校生だった頃、どうしてもなく悲しい日があった。

そんな時に祖母に「側にいてくれたらなあ。」と冗談ぽく笑いながら電話した。すると祖母は米子から松江まで汽車に乗り迎えにきてくれた。そして私を見つけた祖母は何も言わず私の背中に手をやり抱きしめた。あたたかい祖母の胸で涙が溢れた。

少しして祖母は言った。

「せっかくだしいってみようや。」と私にニカッと笑いかけ宍道湖がよく見える所に立ち寄った。

そこで二人で肩を並んでベンチに腰掛けた。

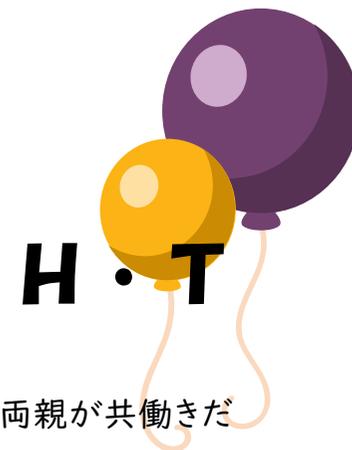
祖母は「大丈夫よ、大丈夫。」と力強く私の手を握った。私も負けないうらい力強く握って笑いかけた。

松江の街と宍道湖、私と祖母をオレンジ色に染まる夕日が鮮やかに色付けていく。変わりゆく空、風、におい、祖母が私を元気づけようとする言葉たちが私だけの心地よい優しい旋律となる。あの一瞬のひと時を私は忘れない。

「来れて良かった」に力強く頷いた。



入賞 「スイカ」



H・T

小学生の頃の夏休みの思い出といえば、家族で毎年大きなスイカを食べたことである。両親が共働きだったこともあって、夏休みに家族旅行に行った記憶がほとんどないせいかもしれない。

ぐったりするくらい暑い日の昼下がり、蝉時雨の賑やかな縁側で、母が朝から冷やしておいた大玉のスイカを切り分ける。祖父母に両親、私たち姉妹の六人家族が一斉にスイカにかぶりつく。「今年のも甘いねえ」「昨日プールで二五メートル泳げたよ」「おばあちゃんは明日婦人会があるね」など、思い思いに他愛のない会話をしながら、スイカをほおばったものだった。小学生の私が一人では抱えきれないほど大きなスイカは、あっという間に平らげられた。「おいしかったねえ」皆が玉のような汗をかきながら、顔を見合わせて笑う。

今思うと、あのスイカの大きさは、安心感の大きさだったといえる。楽しい時にはその喜びを、辛い時にはその苦しみを共有してくれる家族がいる、という絶対的な安心感に包まれて私は育った。ちっぽけな小学生が一人で抱えきれないほどの悲しみや苦しみを経験した時も、その安心感に何度も救われてきた。

大玉のスイカを食べきれぬ家族のいた幸せを、しみじみ思う。



入賞 「一年で一番大事な二日間」

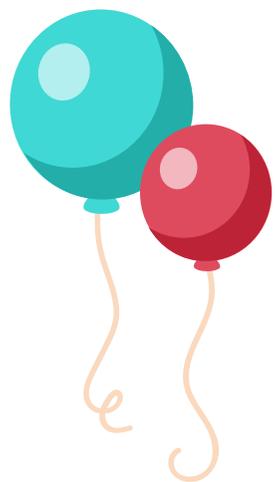


田植えと稲刈り。この言葉を聞くとソワソワする人は、案外多いかもしれない。

子供の頃、田植えや稲刈りの時期になると祖父母、父母が慌ただしく準備を始め、数日前から天気を気にし始めた。当日は目を覚ますと既に作業は始まっていて、私たち姉弟は冷めた朝食を急いで食べ、田んぼまで走った。この日が家族にとって特別大切な日であることは子供ながらに分かっていた。しかし自分は何の役にも立てない。その悔しさに、興奮していた。いつもは子供中心の家族が、この日ばかりは子供の存在など眼中にない。日が暮れるまで、天気が崩れるまでに作業を終わらせなければならない。そのことだけに、大人達は一切の関心を払っていた。時に怒号が飛び交い、時に笑い声が谷間の田んぼに響いた。

私は何か役に立ちたい一心で、休憩の時間に、あらかじめ準備してあったお茶とお菓子をふるまった。疲れた大人達がお茶を啜る姿を見ると、役に立てた誇しさと充足感に胸が満たされた。

時は流れ、あの頃より幾分小さくなった田んぼを、今は年老いた両親が世話している。田植えと稲刈りの日だけ、中年になった弟が駆り出され、両親を指揮し、いつの間にか機械を使いこなしている。トラブルがなければあっけない程早く終わる。私だけが、あの頃と同じだけ役に立たず、お茶の番をするのみである。しかし、私だって一丁前に「田植え」「稲刈り」そう聞くだけでソワソワするのである。



入賞 「私のかわいい妹」

温湯 なぎさ



私には、はるちゃんという5歳の妹がいます。私が中学生の時まではよく遊んでいましたが、高校に入ってから、あまり話さなくなっていました。家から学校までの距離が遠いため、朝は早く家を出たり、帰宅しても疲れて部屋に引きこもってばかりいて、顔を合わせることもなくなっていました。

しかし、今でははるちゃんと毎日交わしている言葉があります。それは「行ってきます。」「行ってらっしゃい。」という言葉です。

私は毎日玄関で「行ってきます」と言ってから学校に行きますが、みんな忙しい時間なので誰の耳にも届いていません。しかし、ある高1の夏、はるちゃんが走って玄関まで来て、「行ってらっしゃい」と言ってくれました。私は嬉しくて思わずはるちゃんを抱きしめました。その日から私とはるちゃんの「行ってきます」「行ってらっしゃい」は日課になりました。はるちゃんは、朝食を食べていても、リビングで二度寝していても、私の声が聞こえると部屋を飛び出して見送りに来てくれます。そんなかわいいはるちゃんは、私の自慢の妹です。